



episode.09

秘湯の魅力と苦悩 ～米丸温泉～

話し手 米丸温泉 店主
やまむら えつこ
山村 恵津子さん（昭和31年4月2日生）

聞き手 川島学園 れいめい高等学校
2年 時 任 香里
2年 南 眞矢呂
2年 新屋 宏明

「米丸地域とは」

米丸マール（約8000年前にマグマ水蒸気爆発で出来た爆裂火口）というのは、米丸地区の真ん中にある田んぼから周りを見渡すと、わかりますよね。山にグルーっと囲われていて、ここが火口の跡っていうのが。米丸は火山の恩恵を受けている場所なんです。昔は何軒か川沿いに温泉があったみたいだけど、今はここだけです。米丸を流れる川を見ると、ときどき温泉が出ているのが分かりますよ。お湯が出ている時は茶色というかオレンジジュースみたいな色だったりするんです。鉄分が多いから茶色でしょうね。冬の朝なんかは、霧というか川からもやが上がって「ここ日本？中国じゃないの？」そんな風に感じる景色になりますよ。

「秘湯の魅力」

ここは冷泉になります。だから、ボイラーで沸かします。うちのお湯は余分なものを体から出すと言われてます。刺さっていたトゲが抜けるとか、化膿していたら膿をだすとか。ちょっと面白い話は、今は手術の糸っていうのは残らない糸とか、ホッチキスとかありますよね。昔は糸が残ってしまうこともあって、それもこのお湯で出てる。長いこと10年とか15年とか経っても、中に残っていても出てる。そういう力があるお湯で、アトピーの人が入ると1回目は好転反応みたいでひどくなってるように見えるけど、だんだん良くなる。そういうお湯なんです。受け継いだ頃は常連さんから「これ薬湯だから大事にしてね」と言われて、最初は分からなかったけど、私もこのお湯で治したことがいっぱいあって、だんだんと分かってきました。私は、小さい時から肌が弱くて皮膚病があったけど、それも治った。そして、頭を怪我した時も病院の先生から縫うって言われて、でも私はね、お湯の方が絶対早いと思ったの。こんな患者さんっていないと思うんだけど、お湯で治すから大丈夫って。そしたら先生から化膿したら大変って言われて1週間したら必ず来てよって。それで1週間お湯につけて病院に行ったら傷跡も見つけれないぐらいに傷がふさがってて、それぐらい早いですよ。



他にもいぼ痔も二十日入るとちっちゃくなって治った方もいますし、切れ痔は1回入ると痛みが止まるらしいんです。

「米丸温泉の歴史」

何年前からあったっていうのはわからないけど、吉野史談の記事に「西南の役で傷ついた塚田十右衛門正家が、米丸温泉に来て保養した・・・」という記事が掲載されていて、約150年以上前にあったのは確か。何年前前になんですけど、テレビ局がこの温泉取材に来て、ちょうどこの塚田十右衛門の話をしていたら、お客さんから「それ僕のおじいちゃん」って言われたの。その方はたまに来るお客さんだったけど、そんな方とは知らずに私もびっくり。とにかく昔は湯治場だったとかいうお話は、常連のおばあちゃんからは聞いたりしますね。



「湯を受け継ぐ障壁」

私が温泉経営を受け継いだのは、2000年頃です。それまでは主人の実家が薬局をやっていたからその手伝いをしていました。この温泉は主人の実家のお父さんから受け継いだんです。最初は、毎日朝から晩まで営業だったんですけど、燃料費の高騰もあって、営業時間を半日にしたんです。それでも厳しくて週3日、そしてお店を閉めようと思ったんだけど、地域の方や常連さんからの声もあったし、私もこのお湯の有難さというのが分かるから、今はなんとか土曜の13時半から17時までの営業です。



常連さんの中には人が少ないから良いつても方いるんです。春過ぎになるかな、お湯に入っていると、川からカジカガエルの鳴き声がすごくいい感じで聞こえて、そういうのを求める方もいらっしゃる。そういう方はここを皆に知られたくないみたい。自分もそれはちょっと分かるんですよ。後継者を育てるとか、もうないですね。コストと手間を考えると、ボランティアに近くなりますよ。(笑) ボイラーも古いし、いつまでも続くかわからないけど、機械が動く限りは続けていきたい。私も入りたいし。

